



博士（人間科学）学位論文 概要書

語り（ナラティブ）からみる高齢者の生きがい

The "Life Worth Living" (Ikigai) of the Elderly in Perspectives of the Narratives

2003年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

鶴若 麻理

Tsuruwaka, Mari

研究指導教員： 嵯峨座 晴夫 教授

わが国において、生きがいという言葉は誰もが理解できる日常語として、古くから使用されてきた。生きがいは、生きている充実感から人生の生きる意味や目的まで含む多面的な概念であるとされる。わが国の高齢化の傾向は一段と強まる中で、高齢者の介護、医療、年金などととも、高齢者の生きがいも一層重大な関心事とされてきた。特に、老後の幸せのことを論ずる場合、生きがいという言葉がよく使われ、生きがい対策という名称で数多くのサービスが行われてきた。

高齢者の生きがいに関しては、生きがい喪失者への精神医学的アプローチや、老年学にみられる幸福な老いに関する研究が行われてきた。高齢者のクオリティ・オブ・ライフ (quality of life) において、生きがいは重要な位置を占めると指摘されてきたが、高齢者の生活満足度や心理的幸福感などの測定が主であった。

そこで、本研究においては、高齢者が生きがいという言葉の意味をどのように捉えているのか、また老いていく過程の中で感じとる生きがいは何かを明らかにするために、高齢者自身の語り (ナラティブ) に注目する。本研究は、今までの先行研究にはなかった、特別養護老人ホームや特定有料老人ホームなどの施設入所者、何らかの障害を抱えて通所リハビリテーション事業所に通う高齢者、高齢末期がん患者、さらに長寿を全うした活動的な高齢者 (新老人の会) などのグループごとに、主として後期高齢者を対象とし、ボランティア活動を通じた継続的なかわりから、高齢期における生きがいの意味とその本質を、語り (ナラティブ) の手法により明らかにすることを目的とする。またあわせて、生きがいと Spiritual Well-being の関係性についても検討を行うものである。

高齢者の語り (ナラティブ) から、生きがいを感じさせるものとして、① 連帯感、② 達成感・追求感、③ 充実感・満足感・幸福感、④ 有用感、⑤ 価値という 5 つの領域が示された。これらは独立しているのではなく、互いに連関しあっている。またこれらの領域と大きく関わるものとして、自己および人生の肯定が抽出された。

① 連帯感は、家族、社会、地域、他者などと連帯しているという感覚である。② 達成感・追求感は、自己の向上を促すような学習や、趣味活動、奉仕活動、創造的活動、仕事などにおける達成または追求である。③ 充実感・満足感・幸福感は、現在の生活、今までの人生の満足など生活全般から得られる安定や充実感を示している。④ 有用感は、自分の能力を発揮して役に立っていると思える感情・感覚である。⑤ 価値は、何に価値をおいているのかという、その人の個人の生き方、信念、生活信条に関係する領域である。

各グループによる違いも明らかになっている。新老人の会のグループでは② 達成感・

追求感および④ 有用感を求める傾向がより際立っていた。通所リハビリテーションのグループでは、家族との関係性において、① 連帯感が強調されていた。特定有料老人ホームのグループは、現況の生活を大切に生きていくという③ 充実感・満足感・幸福感がより強調されていた。特別養護老人ホームのグループは、① 連帯感の領域において、他者と交流したいという欲求が強く見られた。高齢末期がん患者は、死に直面することにより、①から④の領域が実感できず、また⑤の領域では価値観の崩壊がみられている、つまり生きがい喪失の状況であるが、その中でも自分の生きがいを見出そうとする傾向があった。

全体からみると、社会奉仕や自己向上を強調するグループなどのように、各グループの特徴的な違いはあるにしても、① 連帯感および② 充実感・満足感・幸福感が重要とされ、家族を中心とした身近な人々とのつながり、日常生活における充実や平穏、今までの人生の満足などが、生きがいとされた。

高齢期の生きがいの特徴として抽出されたのは、家族の健康や平和、孫の成長などの非自己の人生に自己の生きがいを投影していることであった。また今までの人生の満足を通して、今の自分の存在を意味づけている者が多く、特に過去から現在にいたるまでの時間軸の中で生きがいを捉えていくことは重要であることが示唆された。

高齢者のクオリティ・オブ・ライフにおいて、生きがいは一つの側面ではなく、むしろ、身体的状況、心理的満足、自立や活動のレベル、社会的関係、環境、信念などあらゆる領域にかかわる、全体を包含するものであると言える。そのため、生きがいの内容を理解し、把握するために、高齢者自身の語り（ナラティブ）に注目することが必要かつ有効であることを、本論文で検証した。